

香川県立文書館 収蔵文書目録第15集

讃岐国那珂郡今津村

横井家文書目録(1)

平成25年3月

香川県立文書館

横井家文書目録（1）解題

1. 那珂郡今津村横井家文書について

本文書は、現丸亀市今津町402番地に所在する旧今津村横井家に伝来した家蔵史料（古文書等）であり、総数1万3千点余を数える。江戸時代から明治・大正・昭和に至る各時代の古文書や記録類・書籍類・書画・私信等が含まれている。

2つの蔵や寛政年間築造の母屋に分散して所蔵されていたが、過去に数回程度分類整理が施された形跡があった。主たる古文書は代々庄屋役を務めた時のものである。

本目録は、横井家文書（1）として前半部分の史料番号5,000番までを収載した。後半部分は、次年度に刊行予定である。

2. 調査及び収蔵に至る経緯

平成21年4月10日、横井家より丸亀市教育委員会を經由して同家に伝わる古文書等の調査依頼があった。同年9月、木箱に入れられた古文書類を現認すると共にそれ以外に修理中の土蔵にも大量にある事が分かった。22年5月28日、横井家に古文書等の引き取りに向かう。すでに横井夫妻の手で段ボール箱等に分類されており、そのままの状態引き渡しを受けた。その際、座敷などにある書画等の保存について相談を受ける。11月5日、所蔵場所の確認と書画類の写真撮影を行う。その後、新たな史料等がでてきたので、郵送又は直接本館に追加の預け入れがあった。横井家の古文書整理は、平成22年秋から24年秋までの約2年間を経て終了したが、その間、3回の展示や古文書解読講座などでその概要を公開した。

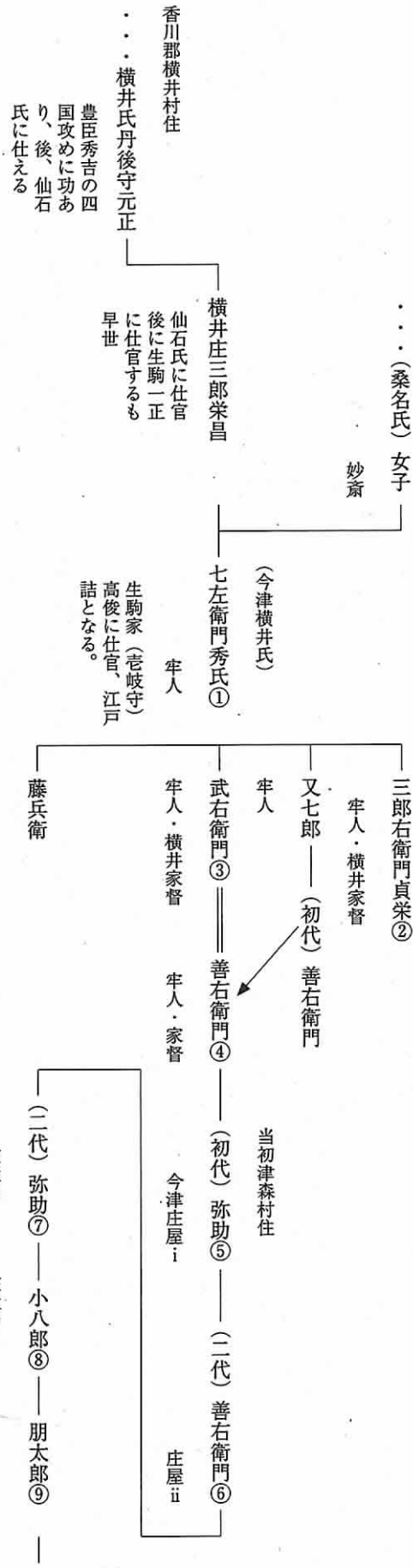
3. 今津横井氏について

系図類や江戸時代末頃に編纂されたと推定される横井家家記抄（仮称）によれば、今津横井氏先祖は、中世の讃岐国香川郡東（条）横井村に代々住した在地領主であり、やがて戦国時代までには有力な土豪クラスの武士に成長している。そして、室町時代、当地域を支配した信州出身の尾池玄蕃頭保俊に早くから与力し、その重臣として中屋敷と地名遺称のある尾池氏居城の横井城を挟んで東の横井丹後、西の中條弾正と並び称されたと伝える。

横井村に居た横井氏は、おそくとも鎌倉時代以前から讃岐国に土着していたらしく、南北朝時代に至って足利氏の旗揚げのため讃岐にやって来た細川定禅に呼応したものと思われる。定禅の一統は阿波に移り、讃岐国内では勢力を持たなかったため、代わって細川頼春の系統である讃岐守護細川京兆家に仕え、前述の尾池玄蕃の組下に位置した。

そして、横井氏は天正6（1578）年からの長宗我部氏による讃岐侵攻に際しては、あくまで土佐方に対しては面従腹背の姿勢であったようである。これについては、例えば、天正13（1585）年の羽柴秀吉軍の四国攻めに際し、秀吉から仙石秀久勢の郷導（軍勢の先導）役を命じられた書状の

今津村横井家略系図 (試案)



No.8861横井氏系譜No.7226先祖覚書から抄出
 ○横井丹後守元正 天正13.7.7横井村ニテ没
 室妙連慶長12.8.25
 ①横井庄三郎栄昌 慶長12.9.7/27没
 室妙斎寛文2.1.11津森山地家ニテ没
 ②横井七左衛門秀氏 天和2.4.6/75没
 ・生駒高俊ニ仕官 (御近習御取次役) 江戸詰
 寛永17年生駒騒動で致仕、同18年春讃州帰国
 ③横井三郎右衛門貞栄 正徳3.11.5/64没
 ○横井藤兵衛 元禄3.8.2/24今津村ニテ没
 ○横井又七郎 元禄13.4.10/44没 今津村ニテ没
 ④横井武右衛門 元禄11.3.16今津村ニテ没
 ⑤横井善右衛門 (初代) ④武右衛門養子享保
 17.11.16/49没
 ⑥横井弥助 (初代)

写（史料番号8463、横井家文書目録（2）に収載予定）があり、これによって、それ以前から秀吉方に内通していたことが窺える。このことに関して、これ以外にもいくつかの傍証史料が散見される。残念ながら、秀吉の書状原本は江戸時代末までに失われて現存しないが、それまでに筆写された案書類や系図などにその内容に係る記述によって全容を知ることができる。

その時の当主横井丹後守元正は、その功績を認められて讃岐に封じられた仙石氏の家臣に取り立てられた。まもなく、元正は多病のために横井村で若死にしたとされている。同所には、この丹後守の墓所があり、墓石もある。それでも、幼子の栄昌が父元正の跡を嗣いで仙石氏に仕えた。しかし、これも九州攻めの失敗によって主家仙石氏が改易になり、秀吉から讃岐国を没収されたため、やむなく帰農し牢人となった。

その後、生駒家に再仕官したことが見られるが、そのときの「一正公より給りし書簡等」は中津の遠山家に所持と記されているだけで、同家にもそれらの書簡は現存せずどのような奉公であったかは分からない。

さらに後、栄昌は今津村の桑名氏の女子（後に妙斎と号す）と結婚するものの早世したという。このため横井村横井家は断絶することとなり、子どもの無かった夫人は今津村に里帰りとなった。しかし、里に戻ってから身重であることがわかり、やがて栄昌の子を産むが、その子が秀氏で幼名を岩松正光と号したという。そして、今津村で横井の名跡を継ぐことになり、これが今津横井家の初代とされている。なお、母の妙斎は、近隣の山地家に再嫁したという。

そして、秀氏も父と同様生駒家に仕官することになるが、そのときの生駒家当主は3代目高俊であった。江戸詰として奉公しているうち、やがて、生駒騒動により、若輩しかも新参者ということで移封先の矢島行きから外れ、幕府から騒動の処分があった翌年の寛永18（1641）年に帰郷した。今津村の西、黄（荒）神の南に住居したとされている。

それから数代は牢人として続くが、秀氏の子武右衛門が兄又七郎の子善右衛門を養子にしたころから家運隆盛し、善右衛門の子（初代）弥助の代に今津村の庄屋になったと思われる。それ以降4代にわたり幕末まで庄屋を勤め、銀札場での役職を兼ねるなど丸亀藩政の現場での業績を重ねた。

4. 横井家文書の概要と意義について

横井家では、2つの蔵や座敷などに大量の古文書はじめ書画や焼き物など什器類等が残されている。その内の大半は、朋太郎の代以降のものであり、明治から昭和初期にかけての記録類で占められている。あとは、初代弥助から二代善右衛門や二代弥助及び、幕末から明治初期にかけての小八郎に係る庄屋時代の史料が、それぞれの名義毎に比較的まとまって保存されていた。

横井家は、前述のとおり丸亀藩の銀札場の役職も兼ねていたようで、上級藩士と共に京都にある京極藩邸に赴いて京都御所の普請用務に従事したことや、その際の会計記録を書き留めた道中記など多様な文書が存在する。

また、丸亀藩で最も古い検地帳写や焰硝蔵（火薬庫）関係の文書や、地方と藩庁とを中継をする接点としての村又は郡役所の城下における出張所の役割を担った「那珂郡町宿」の再建図面やそこ

での事務記録類もある。

また、23・24年度本館主催古文書解読講座中級編のテキストになった二代弥助の道中記（中国・九州への旅、華道免許取得するための京都・大阪への旅など）は、江戸時代末期の旅日記として大変貴重なものである。

ところで、従来、讃岐の歴史では、近世の始まりは生駒氏の入部からといわれている。生駒氏は朝鮮出兵、関ヶ原の戦いを経て、江戸時代初期も讃岐の大名として存続したが、生駒騒動に焦点が当てられ、他の状況はほとんど検証されているとは言い難い。横井家文書によっても知られる如く、生駒氏は讃岐入部に際して、戦国時代からの系譜を引く横井氏はじめ在地武士を多く登用して家臣化した。生駒騒動で生駒氏が出羽へ転封後、家臣の中には高松・丸亀藩主に抱えられた者もいたが、多くは在地に土着していった。戦国時代からの武士の大半がこの時期に没落していく。武士身分を捨て土着した者の中には、家を断絶させた者も多い。村々の世話役となる者も存在したがそれは希な例である。それらの家のいくつかは現代へも先祖伝来の家を存続させてきた。その貴重な一例が横井家である。藩主の変遷があるように、それら家臣の家々の盛衰も当然あったはずだ。そこに史料を残すことは並大抵のことではない。そのような労苦の結果、貴重な史料が今に伝えられてきているのである。